

動詞第2位文の派生について

吉田光演

0. 序論

ドイツ語を始めとするゲルマン諸語には、人称・数の一致と時制を含む定動詞が主節の平叙文及びWH（補足）疑問文の第2構成素に現れる「動詞第2位（verb second, V2と略）」現象がある。V2は基本語順の相違とは無関係に、OV語順（ドイツ語、オランダ語）でも、VO語順（デンマーク語、スウェーデン語などのスカンジナビア諸語）でも見られる：

(1a) Maria *hat* gestern den Film gesehen. (ドイツ語：主語－動詞)

Mary has yesterday the film seen

(1b) Den Film *hat* Maria gestern gesehen. (目的語－動詞)

(1c) Gestern *hat* Maria den Film gesehen. (副詞－動詞)

(1d) ... **daß** [sie gestern [VP den Film gesehen hat]] (非V2)

(2a) Peter *har* ofte drukk^{et} kaffe. (デンマーク語：主語－動詞)

Peter has often drunk coffee

(2b) Kaffe *har* Peter ofte drukk^{et}. (目的語－動詞)

(2c) ... **at** [Peter ofte [VP *har* drukk^{et} kaffe]] (非V2)

ドイツ語では(1d)のように、補文標識“daß”(= that)のある従属節ではOV語順となり、デンマーク語では“at”(=that)のある従属節ではVO語順(=2c)だが、主節ではどちらも主語、目的語、副詞などに続いて定動詞が2番目に現れる。ゲルマン系言語でV2を示さない唯一の例外は英語だが、英語でも疑問詞が主語以外のWH疑問では助動詞が2番目の位置

に生じるので、一種の V2 とみなせる (Rizzi(1989) はこれを “residual V2” と呼んでいる) :

(3) Who *did* Mary see?

ここで次の 2 つの問題が生じる : (i) ゲルマン諸語の特徴である V2 はいかに派生されるのか ? (ii) 英語だけがなぜ一貫した V2 をもたないのか ? 本稿ではこの問題を最近の生成文法の枠組 (「原理とパラメータ理論」 : P & P と略, 又は「極小主義」 : Minimalist Program: MP と略) で考察する。V2 は主要部移動を含むが, V2 文の範疇的性質は何か (CP か IP か), V2 移動の引き金は何か, 未だ十分に説明されていない。吉田(1992) は, ドイツ語の定動詞後置文と V2 文を補文標識 C と屈折辞 I の素性の相違から分析したが, 本稿では文の最適な派生の観点から V2 移動を分析する。MP では基底構造が廃止され, 移動の着地点を範疇的に導入する必要はなくなった。文構成を静的ではなく動的に捉えれば, V2 移動は既成の C や I への移動ではなく, 適格な機能範疇を作り出す最小の経済的な派生であると考えられる。

1. 理論的前提

まず簡単に P&P 及び MP の理論的装置について説明しておく。P&P, MP では, 任意の句 XP の構造は内心構造を表す (4) の X バー式型によって投射し (主要部位置は左か右), 節は (5) のような雛形によって形成される :

(4) a. $XP \rightarrow \text{Spec(指定部)} X'$ b. $X' \rightarrow X^0$ (主要部) 補部

(5) $[CP \text{ Spec} [C' C^0 [IP \text{ Spec} [I' I^0 [VP \text{ Spec} [V' V^0 DP(NP)]]]]]$

(CP: 節, C⁰: 補文標識, IP: 文, I⁰: 屈折辞, V⁰: 動詞)

C⁰ は疑問や主張に関する $\pm wh$ 素性を担い, I⁰ は一致 AGR (人称・数の ϕ 素性と主格) と時制 T を担う機能範疇である¹。辞書において名詞は ϕ 素性と格を付与され, 動詞にも AGR, T 素性が加わり, 屈折形が作られる。これらの N, V の機能素性は統語レベルで各々の機能範疇の領域に移動し,

照合されねばならない。辞書から抽出された語彙は(4)に基づき補部や指定部をとって投射し、要素の移動が行われ、可視(表層)統語論で収束した段階で、音声形式(PF:言語と知覚のインターフェース)と論理形式(LF:言語と概念体系のインターフェース)に受け渡される。言語内インターフェースであるD構造やS構造は消えたので、移動の受け皿となる着地点を予め基底で形成する必要はない。両インターフェースで完全解釈(full interpretation)の原理によって解釈不可能な要素が現ればその派生は破綻する。例えば英語やドイツ語の疑問詞には強いWH素性があり、表層でCP指定部に移動して、Cの素性と照合されないと、このWH素性はPFで不適格要素となり、非文となる。LFで完全解釈に関与する適格な連鎖には(疑問詞などの)演算子-変項の連鎖、主要部の連鎖、項の連鎖などがあるが、これら連鎖を作る α 移動は最後の手段として適用される:

(6) α 移動が適用されるのは、移動しない場合、 α の形態的な特性が満たされない場合に限られる。又、移動操作は別の要素 β の特性を満たすために α に適用することはできない(「自己充足原理(Greed)」)。

(6)の自己充足原理によって、次の(7)において、埋め込み文のIP指定部で既に主格の照合を受けた名詞句“John”が、更に主文の主格位置での照合のために繰り上がるような他律的な移動は除外される:

(7) *[_{IP} [_{Spec} John_i] seems [_{IP} [_{Spec} t_i] is leaving]]

完全解釈の他にも、文法的な演算のための重要な原則がある。それは、合法的な派生が複数個可能ならば、最も簡潔な派生を優先するという「経済性」の原理である:

(8) 「最短移動」: 同等に収束する派生が複数存在するなら、最短の移動・最小の操作によって作られた経済的派生を選べ。

(9) 不可視のLFでの演算(移動)の方が、目に見える表層統語レベルの移動より経済的である(「先延ばし」原理)。

(8)は、幾つかの派生を比べて演算に最適なものを採択する文法の評価原

理である。(9)によって、素性照合を必要とする場合でも、素性が弱いものであれば、明示的な移動を避けて、LFで移動することが優先される。

2. V2文が基底生成たりえない理由

ドイツ語のV2文はSOVから派生する。V2文を基底語順とすると、ドイツ語では動詞はその補部を右方向に統率し、主題と格を与えることになる。しかし(10b)のように分離動詞“voraussetzen”の前綴り“voraus”の後に目的語が来ると、動詞—補部の順序は(10a)と同じだが、非文になる：

(10)a. Die Naturwissenschaft **setzt** den Menschen immer **voraus**.

the natural sciences presuppose the human always

b. *Die Naturwissenschaft **setzt** immer **voraus** [den Menschen].

c. daß [die Naturwissenschaft den Menschen immer **voraus** [**setzt**]]

(SOV)

動詞と補部の関係は(10c)の従属節を基底語順と考えることによって明示される。動詞は補部を左方向に統率しており、移動するのは前綴りではなく基礎動詞“setzt”なので、(10a)は補部—動詞の順序を守るが、(10b)ではこの関係が成立せず、目的語に格が付与されない。これは他のゲルマン諸語にも当てはまる。即ち、(10a)のV2文は次の連鎖から派生される：

(10a') [die Naturwissenschaft_{t_j}] [**setzt**_{t_k}] [t_j den Menschen immer **voraus** t_k]

(前域) Spec (V2) X⁰ (中域)

V2位置の前の前域(Vorfeld)は、中域(Mittelfeld)と呼ばれる領域にある句の移動で埋められねばならない。この配列から、前域とV2位置はある種の機能的な指定部と主要部の関係にあることが予測される。

3. 統一CP仮説とその問題点

まず、従属節CPとV2文を同一範疇と考える標準的分析(これを「統一CP分析」と呼ぶ)を考察する。統一CP分析は、Xバー構造にそって

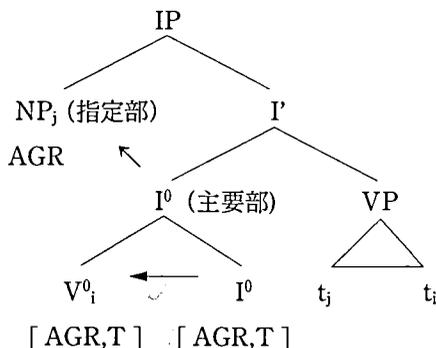
英語と同様の文・節構造がD構造で派生されると考える：

(11) [_{CP} Spec [_C C⁰ [_{IP} Spec [_I I⁰ [_{VP} Spec [_V V⁰ NP]]]]]]

(WH句) 補文標識 主語 屈折辞(主語) 動詞 目的語

屈折辞と融合した動詞は可視統語レベルか LF で I⁰ 位置に付加移動し、I⁰ によって動詞の AGR, T 素性が照合される(主要部間の素性照合)。主語は動詞句 VP の指定部に生成され、文 IP の指定部に移動して、指定部-主要部の一致の下で、主格の照合を受ける(「VP 内主語仮説」)：

(12) 素性照合



I⁰ による NP と V の照合が済めば、AGR 素性は消え、LF では時制 T のみが残る。(11)は個別言語を越えた節の雛形であると想定されているが、ゲルマン諸語の主文(V2)と従属節(非V2)も、(11)から導かれると考えられた。

時制文で動詞は I⁰ に上昇し、そこで一致・時制の照合がなされる：

(13)a. [_{IP} - [_I [_{VP} Peter [_V gestern [_V ins Kino [_{V0} ging]]]]] [_{I0}]]

Peter yesterday into the movie went

b. [_{IP} Peter_j [_I [_{VP} t_j [_V gestern [_V ins Kino [_{V0} t_i]]]]] [_{I0} ging_i+I]]

この移動は I の AGR 素性が強い場合に必然的になる(Pollock(1989))。

更に、英語と同様に主語は表層で IP 指定部に移動する。さて、この段階で C⁰ 位置に従属接続詞がある場合には、定動詞は I⁰ 位置にとどまる：

(13)c. [_{CP} daß [_{IP} Peter_j [_I [_{VP} t_j [_V gestern ins Kino [_{V0} t_i]]]]] [_{I0} ging_i+I]]

もし C⁰ が語彙的に埋まらない場合には、C⁰ 位置に定動詞が移動する：

(13)c.*[_{CP} () [_{IP} Peter_j [_I [_{VP} t_j [_V gestern ins Kino [_{V0} t_i]]]]] [_{I0} ging_i+I]]

- (13)d. [_{CP} [_C *ging*_i+I_k] [_{IP} Peter_j [_r [_{VP} t_j [_v gestern ins Kino [_v t_i]]] t_k]]

Grewendorf(1988)は「Cは空ではいけない」というCに関する原理からCへの動詞移動を導出した。あるいはゲルマン諸語のCはCとIの中間物(Confl)であり、時制[+T]がこの節の最上位に付与されなければいけないので、定動詞が上昇するという分析もなされた(den Besten(1983), Rizzi(1990))。

更に節CPの指定部に任意の句を移動(話題化)して、V2文が出来る:

- (13) e. [_{CP} Peter_j [_C *ging*_i+I_k] [_{IP} t_j' [_r [_{VP} t_j [_v gestern ins Kino [_v t_i]]] t_k]]

- (13) f. [_{CP} *gestern*_i [_C *ging*_i+I_k] [_{IP} Peter_j [_r [_{VP} t_j [_v t_i ins Kino [_v t_i]]] t_k]]

統一分析は(11)の節の普遍的雛形に準拠して(13c)の従属節(非V2)と(13e), (13f)のV2文を同一のCPと捉える。これによって確かに補文標識とV2との相補分析が説明できる。例えばドイツ語では条件文を導く接続詞“wenn”を省略し、定動詞を前置できる(=(14b))が、接続詞と定動詞前置は共起しない。この事実は空のC位置に定動詞が代入されれば説明できる:

- (14a) [_{CP} [_C *wenn*] das Wetter morgen schön wäre]...

if the weather tomorrow nice were

- (14b) [_{CP} [_C⁰ *wäre*_i] das Wetter morgen schön t_i]...

- (14c) **wenn wäre*_i das Wetter morgen schön t_i...

又、Höhle(1988)が指摘した VERUM-Fokus(真理性の焦点)の配置でも、従属接続詞とV2における定動詞は同等にふるまう(太字に強勢が置かれる):

- (15a) Ich behaupte aber, **daß** er damals im Krankenhaus lag.

I assert that he at that time in the hospital lay

- (15b) Ich behaupte aber, er **lag** damals im Krankenhaus.

(15a),(15b)とも、強勢された語彙を含む命題全体の真理値に焦点がある。

これも従属接続詞と V2 位置の定動詞の統語的共通性を示す証拠になる。

しかし他方、補文と V2 文が範疇的性質として異なるという証拠もある：

(16)a. [CP daß Hans seine Frau nicht *liebt*] überraschte mich.

that Hans his wife not loves surprised me

(16)b. *[V2 Hans *liebt* seine Frau nicht] überraschte mich.

(16a) のように、CP 節は主語文になれるが、V2 文は主語文にはなれない (=16b)。

又、CP 節は “ohne” のような前置詞の補部になりうるが、V2 文は不可能である：

(17)a. ohne [CP daß er sich für die Prüfung vorbereitet *hat*]

without that he for the test prepared has

(17)b. *ohne [V2 er *hat* sich für die Prüfung vorbereitet]

又、“daß”などで導かれた CP 節は非常に短い文ならば、「中域」(基底の動詞位置の左側)に配置されてもマージナルながらも容認できるが、V2 文は非文になってしまう ((18a) は Bayer(1995)の例)：

(18)a. Als Hans gestern [VP seiner Schwester [CP daß er krank *sei*] [V sagte]]...

when Hans yesterday to his sister that he ill is said

(18)b. *Als Hans gestern seiner Schwester [V2 er *sei* krank] sagte...

この対比から CP と V2 文は範疇的に異なると結論できる。むしろ C と V2 位置の定動詞は統語的な派生タイプとして同質だと言える。統一 CP 分析は C 位置が V2 の着地点になりうるという意味で、V2 が可能という必要条件を述べただけで十分条件を示していない。V から I への移動は動詞の一致素性の照合のために必要とされた。しかし英語の平叙文は IP ばかりなのに、他のゲルマン諸語はなぜ C を投射するのか (I から C への移動の必然性) ? なぜ (13c) が IP ではないのか? Rizzi や Grewendorf の分析は、定動詞を自身のためではなく、動詞とは別の C の特性を救うために移動させるので、自己充足原則を満たしていない。又、D 構造表示が

消えたので、I, C といった空の範疇位置を V2 移動の前に導入する必然性はない。(11)の節の CP—IP 構造は英語には当てはまるが、言語横断的な普遍性を持つのか？N, V のような語彙範疇は普遍的だとしても、I, C のような(実質意味の乏しい)機能範疇が遍在的である理由はない。この問題を背景にして次に対案を考察しよう。

4. V2 言語の補文 CP の構造

2 節で見たように、ドイツ語では名詞句は基底の動詞位置の左に生成されるが、節は動詞の右側に現れる (Grewendorf(1988)の例)：

(19) *Es hat ihn₁ überrascht, [daß Boris Becker₁ das Finale gewonnen hat].

it has him surprised that Boris Becker the final won has
代名詞“ihn”が、CP内の固有名“Boris Becker”を束縛することによって、(19)の同一指示解釈は束縛原理 C (指示的な名詞は束縛されない)に違反する。ということは、目的語が節 CP を c 統御する位置にあることを意味するので、CP は付加部ではなく、動詞の(最も近い)補部であるはずだ：

(19') ... [v' ihn₁ [v' [v⁰ überrascht] [CP daß Boris Becker₁ das Finale gewonnen hat]]]

従って、格付与されない CP 補部は例外的に動詞の右に生成されると考える。

さて、ドイツ語の節構造が(11)の変種(主要部 V⁰, I⁰ が右端)だとする：

(20) [CP_ [C C⁰ [IP _ [I I⁰ [VP NP [v' 補部 V⁰ (補文)] I⁰]]]]]]

動詞句の右側に更に I⁰ 位置を設定すると、V⁰ から I⁰ へ定動詞移動の移動によって、定動詞は再び CP 補部の右側に現れることになってしまう：

(20') [CP_ [C C⁰ [IP _ [I I⁰ [VP NP [v' t_i 補文] [V⁰+I⁰]_i]]]]]]

しかしながら、(20')のような構文は非文である：

(21) *weil der Chef ihnen mitgeteilt t_i [CP daß die Putzfrau entlassen sei] [I hat_i]

because the chief to them told that the cleaning-lady fired was has

次も同様のパラドックスを示す例である (Haider 1993) :

(22a) Er hat mich nicht gefragt, ob ich zufrieden bin.

He has me not asked whether I satisfied am

(22b) [_{SpecC} [_{VP} t_i gefragt [ob ich zufrieden bin]]] hat er mich_i nicht _.

(22c)*[_C daß] er mich_i nicht [_{VP} t_i gefragt [ob ich zufrieden bin] t_i] [_I hat_i]

(22b) は, (22a) から補文を含む VP の一部を前域 (V2 位置の前) に話題として移動させたものであり, V2 の特性からして, “gefragt ... zufrieden bin” まだが一つの構成素として認定できる。もし節の右端に独立した I が存在するとすれば, (22c) のように I 位置の左に話題化された VP 全体を配置しても構わないはずであるが, (22c) は非文になる。これらの観察から次の一般化が得られる:

(23) ドイツ語では動詞句を補部にとる独立した I⁰ 位置は存在しない。

Haider(1993) も, ドイツ語には I は存在しないと主張する。しかし, 機能範疇内部の時制 T は LF での完全解釈に必要であり, いかなる形であれ文構造には T 素性が反映されているはずである。そこで, 次のような I の形態を区別しよう:

(24) a. I が統語的に独立した機能範疇として VP を補部にとる (英語)。

(24) b. I は接辞として動詞と結合し, 混合範疇 [_{V/I} V⁰ I⁰] を作る (V2 言語)。

(24b) で形態的な I は語彙範疇 V と融合している ({+V, -N, +AGR, +T} 素性) ので, そのままでは (12) のような独自の AGR, T の素性照合の領域をもたない。従って, 定動詞が基底位置にとどまると, 一致素性としての I⁰ が統語的に見えずに, 主格照合も, 動詞の屈折素性の照合もできず, LF レベルで排除される:

(25)(= (13)c)*[_{V/TP} Peter [_{V/T} gestern ins Kino [_{V/I} [v⁰ ging]]]]

(25) には独自の I⁰ 位置がないので, 定動詞を LF で I⁰ に繰り上げることもできない。しかし, この構造に補文標識があれば適格になるので, 屈折素性は LF で機能範疇の C 位置に付加移動すると考える。例えばドイツ

一 CP 分析とは逆に I の素性は弱いと考える。つまりドイツ語の補文は次の構造になる：

(29) [CP_ [C C⁰ [I/V 主語 [I/V (NP 補部) V/I⁰ (CP 補部)]]]]

独立した I⁰ 位置が存在せず、動詞 V と融合した混成範疇になっているとすれば、CP 補部のふるまいのパラドックスは解決される：

(22a') Er hat mich nicht [I/V⁰ [I/V⁰ *gefragt* +_P] [CP ob ich zufrieden bin]]

つまり非文を生み出す右端の孤立した I 位置など存在しなかったのである。

以上の議論は、VO 語順のスカンジナビア諸語にも言える。統一 CP 分析ではスカンジナビア諸語の V2 でも、動詞が I に上昇することが C への移動の前提になる。ところが従属節では I への移動は観察されない (Vikner(1995) の例による)：

(30)a. Jeg tror ikke [at Peter [VP ofte [V *spiser* tomater]]]. (デンマーク語)

I think not that Peter often eats tomatoes

(30)b. *Jeg tror ikke [at Peter [_I *spiser*_i] ofte t_i tomater].

(30)c. Je ne crois pas [que Pierre [_I *mange*_i] souvent [VP t_i des tomates]].

(30)d. I don't think that Peter [I] [VP often [V *eats* tomates]].

VP 副詞は VP の左の境界にあり、定動詞が副詞の前にあれば、定動詞は I に上昇している。例えばフランス語 (= (30c)) では、強い AGR 素性の故に動詞が可視統語論で I に付加され、素性照合される。英語は AGR 素性が弱いので、可視統語論では (30d) のように V 位置にとどまり、LF で I に移動して素性照合される。英語には I への移動がないので、I から C への移動もない (非 V2)。デンマーク語は V2 言語だが、従属節では英語と同様に定動詞は副詞の後に来る (= (30a))。V2 では定動詞が C に移動するので、定動詞は義務的に I に繰り上がるはずだが、そのような派生は非文である (= (30b))。故に、デンマーク語は事実と反して V2 がないと予測される。でなければ、V から I への移動なしに、V から一挙に C に移動する：

(31) [CP Peter_k [C *spiser*_i] [IP t_k [I [_P ϕ] [VP ofte t_i tomater]]]]

(31) は I⁰ を飛び越えた主要部移動であり、移動の局所性 (最短移動) に

違反する。動詞と C の間にアクセス可能な位置がないとすれば、 I^0 位置自体がないと考えた方が得策である。ドイツ語と同様に I^0 と融合した動詞位置だけを認めれば、デンマーク語の従属節における定動詞のふるまいは簡単に説明できる：

(30a') Jeg tror ikke [c_0 at] [I/VP Peter [I/V' ofte [I/V' [I/V^0 spiser] tomater]]]].

更に (30a),(30d) の違いは、英語においては I 位置に生ずる動詞が、法助動詞やアスペクト助動詞や “be”, “do” などの少数の語彙に限定されているのに対して、ドイツ語などではそのような区別が存在しないことにも対応している。

(32)a. *Every student [I must] [VP can speak two foreign languages].

(32)b. Jeder student muß [VP zwei Fremdsprachen sprechen können].

英語では、法助動詞は I に生成され、VP 内部に現れないので、(32a) が非文になるが、ドイツ語では (32b) のように “können” が VP 内に不定詞として現れ、更に “muß” が定動詞になりうる。つまりドイツ語の助動詞は全て V に属している。他方英語は、語彙範疇としての V から区別された少数の助動詞を辞書内部に切り取った結果、 I^0 範疇が独立した統語位置として目に見えるようになったといえる。

5. V2 の派生

次に V2 文の派生を考察する。4節の考察から、次の一般化が得られる：

(33)a. [IP 主語 [r I^0 [VP V^0 ]]] (英語)

(33)b. [CP C^0 [IP 主語 [r I^0 [VP V^0 ]]]] (英語)

(34)a. [CP C^0 [I/VP 主語 [I/V' ... I/V^0 ...]]] (V2 言語)

(34)b. [v_2 ... [V_i] [v/IP ... t_i ...]] (V2 言語)

英語には独立した I^0 があり、その指定部で主語が認可され、主文はその投射 IP である (= (33a))。V2 言語のゲルマン諸語には独自の I^0 範疇は存在せず、屈折辞は動詞範疇の中に埋没している。その投射である V/IP は

適格文ではない：

(35) *[_{V/IP} Peter [_{V/I} Tomaten [_{V/P} [iBt + I⁰]]]]

Peter tomatoes eats

(35) は基底語順 SOV だが非文である。(35) を救う方法は、(34a) のように補文標識を挿入することであった。同様の手段として (34b) の V2 の派生がある。前置された定動詞がいかなる範疇 (C か否か) に関わらず、定動詞が文投射の最上位にあり、主要部連鎖 (V/I⁰, ti) を作るものが (35) を救う決定的要因になる。

英語では動詞は LF で I 位置に繰り上がり、I の領域で素性照合が行われる：

(36) a. [_{IP} He [_I [_P AGR,T] [_{VP} often eats tomatoes]]] (可視統語レベル)

(36) b. [_{IP} He [_I [_P [_V eats_i] [_P AGR,T]] [_{VP} often t_i tomatoes]]] (LF)

V2 言語の屈折素性も弱いので、可視統語論で義務的に繰り上がる必要はない。しかし、V2 言語はそもそも I 位置を確立していないので、C が投射されなければ、LF で移動できる照合領域がない。それ故に、可視統語レベルで I に当たる適切な機能範疇を自ら創造しなくてはならない。これが V2 移動である：

(37) (= (34b)) [_{IP} ... [I⁰]_i [_{V/IP} ...t_i ...]] (V2 文)

この移動は語彙範疇の動詞ではなく、V に付加された機能的な屈折素性によって駆動されるので、移動で出来る連鎖は屈折辞 I の連鎖であり、V2 位置は動詞を含む機能範疇 I⁰ (= [_P V⁰ I⁰]) に転ずる。この位置で動詞の一致素性と I の一致素性が照合される。これは定動詞自らの素性照合のための移動であるから、自己充足原理を満たす。V2 移動で派生する文は範疇的には I の投射 = IP ということになり、節 CP とは範疇的に区別される。それ故に (15)~(17) の対比が説明できる。

V2 文の指定部には主語だけではなく、任意の句が現れうる。しかし、V2 文の指定部が英語と同様に卓越した主語位置だという証拠もある：

(38a) Das Kind hat das Buch schon zweimal gelesen.

the child has the book already twice read

(38b) Es (=das Kind) hat t das Buch schon zweimal gelesen. (“es” = 主語)

(38c) *Es(=das Buch) hat das Kind schon zweimal t gelesen. (“es” = 目的語)

ドイツ語の “es” (=“it”) は強勢を置けない代名詞であり、(対比アクセントのある) 話題にはなれないので、(38c) のように目的語としては前域に現れることは不可能だが、主語ならば問題ない(=(38b))。主語にとっては前域 (V2 指定部) が主格照合の卓越した位置として機能すると考えれば、この対照は説明できる。即ち V2 文の指定部と V2 位置の I の間で主格の照合がなされる：

(38b') [IP-Spec es_j [NOM]] [∅ hat_i] [t_j das Buch schon zweimal gelesen
[V/I t_i]]]

ただし、英語の主格照合と違って、(38b') の指定部—主要部間の一致関係は主格の照合に必須ではない。V2 文の指定部は主語以外の要素が来ても構わず、この場合は話題要素のための非項 (A') の位置となる：

(38d) [das Buch] [hat] das Kind schon zweimal t gelesen. (話題化)

このふるまいは主格照合のメカニズムを緩めることによって解決できよう：

(39) 独立した統語範疇としての I はその指定部で主格を照合する (英語)。

派生的に作られた I には、指定部—主要部の間での主格照合の他に、I と連鎖関係にある基底の動詞位置とその指定部での主格照合のオプションがある。

この屈折辞連鎖 (V2 の I の連鎖) による主格照合は (28) の一般化からも導かれる：

(38d') das Buch [I hat_i] [SpecV/I das Kind] schon zweimal [V/∅ t_i] gelesen.
機能範疇 連鎖による格照合

話題化を機能範疇 Top(=topic) の投射 TopP によって分析する試みもあるが (Müller/ Sternefeld 1993), 機能範疇 Top と指定部の一致による分析では、(38b) のように話題ではない主語が V2 の指定部にある場合には

適用できない。又、 θ 役割を持たない虚辞の“es”がV2文の指定部を占める場合も説明できない：

(40) [es] [klopfte] jemand an die Tür. (= “Someone knocked at the door”)
 WH句とは違って話題は可視統語論で機能範疇の指定部に移動する必要はなく、LFで演算子として機能する。ただし、英語の否定辞一助動詞構文のように、話題要素が明示的に前置されれば、定動詞と一致の関係を作り出す。要するに、ゲルマン諸語のV2の平叙文には次の2通りの具現形が可能である：

(41) a. [_{IP} 主語]_i [_{I⁰}]_i [_{V/IP} t_j ...t_i...] (主語と I⁰ の一致)

(41) b. [_{IP} XP_[+top]]_i [_{I⁰}]_i [_{V/IP} t_j ...t_i...] (話題要素と I⁰ の一致)

重要なことは、主語・話題のいずれも、V2移動し、機能範疇 I⁰ として機能する定動詞によって始めて(その指定部で)認可されるということである。

ゲルマン諸語の補文 CP と V2 文は屈折素性の照合関係を合法的にする派生であった。この2つがなぜ最適な派生であり、CP-V2文はなぜ許されないのか？

(42) *[_C daß] das Kind [_ρ hat] das Buch schon zweimal gelesen t.

(43) *[_{CP} _ C⁰ [_{IP} XP_j [_{I⁰}]] [_{VP} t_j ...t_i ...]]

語彙的なC要素がある場合にはV2移動は起きないので、(42)は非文になる。しかしV2文が基本的にIPならば、英語の構造とのアナロジーで(43)のようにIPの上にCを投射してもよさそうに見える。なぜCPとV2文は二者択一的なのか？この問題はMP理論の枠組みで簡単に解決できる。(42)の派生は機能範疇 I⁰ を投射するために2回の派生を必要とする。即ち、定動詞の前置による I⁰ の創出と補文標識による定動詞内の I⁰ の活性化である。ところが、この2つの内のいずれかで既に適切な派生が得られるのだから、経済性の原理によって(43)のような表示は最適な派生とはならないのである。つまり最小の適格文の派生から、CとV2の相補分布が導き出される訳である。以上をまとめると次のように言える：

(44) V2言語の動詞の一致素性は弱い。しかし、一致素性を照合すべき I

位置は存在しない。それ故に、語彙的な C の照合領域で屈折素性が機能範疇に転じるか (C の投射), 又は定動詞自ら移動して I 位置を作り出さねばならない (V2)。

Haider (1993) は, (i) 機能的にマークされた定動詞の投射は機能範疇によって認可される, (ii) この認可は定動詞句が機能範疇の補部になる場合であると主張する。即ち C が VP を統率するか, 定動詞が VP を補部とする位置に移動して, VP を統率する場合に, (i) と (ii) が満たされるというのである (Haider: 84-91) :

(45)a. [CP C⁰ (認可 =>) [VP 主語 [v' ...V...]]] (補文)

(45)b. [V2 ... [V⁰]_i (認可 =>) [VP ...t_i...]] (V2)

しかし、これでは (26) のバイエルン方言の C⁰ の屈折は説明できない。更に、定動詞による VP の統率よりも、I 位置創造による素性照合のための主要部移動と分析する方が英語を含めた一般的な素性照合メカニズムに合致している。又、機能範疇による VP の統率を認めれば、空の C, I による VP 統率を排除しなければならない。実際 Haider は、音声的に空の機能範疇を認めない。これは基底で空の C や空の I を予め導入することによって派生を救うことはできないという意味では正しい。しかし、空の機能範疇を完全に禁止する理由は存在しない。なぜなら英語の屈折辞位置 I がまさに空の機能範疇の候補であるからだ：

(46) [IP John_i [P ϕ] [VP t_i often [v eats] tomatoes]]

(46) で “eats” の屈折素性を認可するのは空の I である。Haider によれば、空の機能範疇は認可されねばならないが、(46) は主文なので I を認可する主要部はない。そこで彼は、matching projection により (46) を IP/VP に還元し、空位置を消す：³

(46') [IP/VP John [I/V⁰ often [I/V⁰ eats] tomatoes]]

しかしこれでは VP を認可する機能範疇 I も消えるので、V2 言語と同じ構造になり、循環論になるので、英語がなぜ非 V2 言語かが説明できない。本稿の分析では、(46) の構造はまさに英語が V2 を失った根拠を示すもの

である。空の I 位置が抽象的に確立され、LF でこの I に定動詞を関係づけることが可能になったからこそ、英語では V2 のような可視的な動詞移動の必要性がなくなったのである。

6. WH 疑問

間接疑問文では V2 文は許されず、CP 節でなくてはならない：

(47a) *Ich weiß nicht, [v₂ wen [hat] Maria t geküßt t].

I know not whom has Maria kissed

(47b) Ich weiß nicht, [CP wen [C φ] Maria t geküßt hat].

これは主文の動詞が CP 節を下位範疇化し、疑問詞が CP の指定部に移動するために必然的になる。しかし、主文の疑問文では V2 が生じる：

(48) [v₂ Wen_j [hat_i] Maria t_j geküßt t_i]?

(48) は一般に CP 節と考えられているが、主文では時制辞が [+WH] 素性を担える (Rizzi 1990) と考えれば、V2 文 (=IP) と分析することも可能である。(48) で仮に疑問詞が CP 指定部に移動し、定動詞が C に移動したとしても、この派生は元の派生と相同的 (機能範疇の主要部から主要部への移動と、機能範疇の指定部から指定部への移動) なので、元の V2 文 (=IP) に還元されると考えられる：⁴

(48') [CP Wen_j [C hat_i] [IP t_j [t_i] Maria t_j geküßt t_i]]?

→ [IP Wen_j [I hat_i] [VP Maria t_j geküßt t_i]]?

V2 文の指定部は主語以外の非 A 位置であってもよいので、疑問詞は IP 指定部に位置することになる。こうした還元は英語の WH 疑問文にも現れる：

(49a) [CP Who_j [C did_i] [IP Mary [t_i] [VP see t_j]]]?

(49b) *Who did often see Mary?

(49c) Who [I φ] often saw Mary?

(49a) のように疑問詞が主語以外のものであれば、疑問詞は CP の指定部に移動し、更に “do” が C 位置に移動して、節 CP へと拡張する。しかし、

疑問詞が主語の場合は“do”の挿入が行われない。(49c)は(48')と同じ経済性から派生する：

(49c') [CP [Spec Who_j] [C I_i] [IP [Spec t_j] [I_o t_i] [VP often saw Mary]]]?
 → [IP [Spec Who] [I⁰ φ] [VP often saw Mary]]?

IP 指定部にある主語の疑問詞が CP 指定部に移動し、屈折辞 I が C 位置に上昇すると、両者の連鎖は元の IP と同じ相同形をなす。それ故に派生の経済性により、元の構造に戻る ((49a) では疑問詞は IP 指定部にないで、相同形ではない)。従って、WH 疑問文で C 位置を投射するか否かに関しては、英語も V2 言語も類似したふるまいを示すことになり、英語の“residual V2”も説明できたことになる。

7. まとめ

V2 現象は機能範疇の在り方に関して再考を促す契機である。本稿は、V2 文がダイナミックかつ経済的な派生から導かれること（屈折範疇 I の創出）を示した。移動の着地点が D 構造で用意されるという派生イメージでは、文の適格な派生を導くことはできない。CP や IP といった範疇は単なるラベルであり、文の最小の適格な派生にとって機能範疇が果たす役割の分析こそ言語間の相違を説明する鍵になる。この方向は、イディッシュ語の変異（従属節における V2 の存在）、英語における V2 の喪失の歴史の変遷などの分析においても今後役立つだろう。

注

- 1 Split-Infl 仮説により、I は AGR-s, T, AGR-o (目的語の一致) の投射に分離するが、ここでは分析の簡略化のため一括して I にまとめておく。
- 2 本稿では、C⁰ への AGR の LF 移動が AGR の主格の照合・動詞の屈折素性の照合を保証すると考えるが、Watanabe(1993) は、AGR は主格の照合の後で更に C⁰ に移動して素性照合されねばならないと分析し

ている。

- 3 “matching projection” とは、ある投射が他の投射を直接支配し、上位の指定部・主要部が下位投射の指定部・主要部として機能する場合に、2つの投射が二重に重なった投射になることを言う (Haider 1988)。
- 4 この派生の相同性は Haider(1988) の matching 効果と同じだが、2つの投射が機能範疇である場合にのみ、上位投射が下位投射に還元されうると考える。従って、CP から IP への還元は可能だが、IP から VP への還元はありえない。

参考文献

- Bayer, J. 1984. COMP in Bavarian Syntax. *The Linguistic Review* 3, 209-274.
- Bayer, J. 1995. On the Origin of Sentential Arguments in German. In: *Studies in Comparative Germanic Syntax*. ed. H. Haider et al. Dordrecht: Kluwer, 47-76.
- Chomsky, N. 1986. *Barriers*. Cambridge, Mas.: MIT Press.
- Chomsky, N. 1991. Some Notes on the Economy of Derivations and Representations. In: *Principles and Parameters in Comparative Grammar*. ed. R. Freidin. Cambridge, Mas.: MIT Press. 417-454.
- Chomsky, N. 1992. A Minimalist Program for Linguistic Theory, *MIT Occasional Papers in Linguistics* 1.
- Chomsky, N. 1993. *Bare Phrase Structure*. ms. MIT.
- den Besten, H. 1983. On the Interaction of Root Transformations and Lexical Deletive Rules. In: *On the Formal Syntax of Westgermania*, ed. W. Abraham. Amsterdam: Benjamins, 47-138.
- Grewendorf, G. 1988. *Aspekte der deutschen Syntax*. Tübingen: Narr.
- Grimshaw, G. 1993. *Minimal Projection, Heads & Optimality*. ms. Rutgers University.

- Haider, H. and M. Prinzhorn (eds.) 1986. *Verb Second Phenomena in Germanic Languages*. Dordrecht: Foris.
- Haider, H. 1989. Matching Projections. In: *Constituent Structure*, ed. A. Cardinaletti, G. Cinque and G. Giusti. Dordrecht: Foris, 101-122
- Haider, H. 1993. *Deutsche Syntax – generativ*. Tübingen: Narr.
- Müller, G. & W. Sternefeld 1993. Improper Movement and Unambiguous Binding. *Linguistic Inquiry* 24, 461–507.
- Pollock, J. 1989. Verb Movement, UG and the Structure of IP. *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.
- Rizzi, L. 1990. Speculations on Verb Second. In: *Grammar in Progress*. ed. J. Mascaró and M. Nespó. Dordrecht: Foris, 375–386.
- Stechow, A. & W. Sternefeld. 1988. *Bausteine syntaktischen Wissens*. Opladen: Westdeutscher Verlag.
- Vikner, S. 1995. *Verb Movement and Expletive Constructions in the Germanic Languages*, Oxford: Oxford University Press.
- Watanabe, A. 1993. *The distribution of PRO and the that-trace effect in the Minimalist Program*. ms. MIT.
- 吉田 1992. 『動詞第 2 位と補文標識に関する一考察』 *Ryudai Review of Language & Literature* 37, 169-193.

Zur Ableitung der Verb-Zweit-Sätze

Mitsunobu Yoshida

In diesem Aufsatz handelt es sich um die folgenden syntaktischen Probleme:

1. Wie läßt sich ein Verb-Zweit(=V2)-Satz in germanischen Sprachen ableiten?
2. Warum zeigt das Englische kein V2-Phänomen?

In der bisherigen Generativen Syntax wurde der V2-Satz einfach als CP betrachtet: Das finite Verb wird zuerst von V in die I^0 (= Flexion)-Position bewegt. Wenn die Komplementierer-Position unbesetzt ist, wird das finite Verb weiter nach C geschoben:

3. [_{CP} Gestern_i [_C ging_i + I_k] [_{IP} Peter_j [_{I'} [_{VP} t_j [_{V'} t_i ins Kino [_v t_i]]]] t_k]]

Diese Analyse erweist sich jedoch problematisch: (i) Im Gegensatz zum Englischen gibt es in V2-Sprachen keine eigenständige I^0 -Position, die das Verb aufnimmt. (ii) Der V2-Satz ist kategorial vom Nebensatz (=CP) zu unterscheiden. (iii) I nach C-Bewegung ist theoretisch unmotiviert, weil das finite Verb erst dann angehoben wird, wenn sein morphosyntaktisches Bedürfnis in der Grundposition nicht erfüllbar ist (das Prinzip von "Greed").

Wenn man eine dynamische Derivation annimmt, in der ein funktionaler Kopf erst dann projiziert wird, wenn er nötig ist, dann kann man das Verhältnis von V2- und Nebensätzen korrekt erfassen. Die Flexionskategorie wird in V2-Sprachen ans Verb V^0 angehängt. Somit ist z.B. ein SOV-Satz im Deutschen eine Projektion der Kategorie von I/V^0 (=4). Diese Struktur ist jedoch nicht wohlgeformt, da die Flexionsüberprüfung zwischen Subjekt und I^0 syntaktisch nicht erfolgt.

